執筆回顧

元編集委員　寺　嶋　由之介

部局史のプラズマ研究所の部分を担当した時、実は同研究所の移転と改組の話が出ていた。名古屋大学史編集室の原稿締切りの昭和六十二年度末では、両方共概算要求の段階で本決まりではなかったが、事態はどんどん進んでいた。それで、編集室に相談して頂きながら、ともかく締切りまでに起こったことはすべて書き込み、それ以上は、［追記］の形で補うと云う方針を立てた。その結果が部局史二第十五章である。

プラズマ研究所は昭和三十六（一九六一）年四月に大学附置共同利用研究所として創設され、平成元（一九八九）年五月にその二十八年の歴史を閉じ、文部省核融合科学研究所と名古屋大学プラズマ科学センターに改組された。前者には広島大学核融合理論研究センターと京都大学ヘリオトロン核融合研究センターの相当部分も合流した。私自身はプラズマ科学センターに所属することになったので、編集委員会にそのまま残れたのはプラズマ研究所の後始末に好都合であった。そして、平成四（一九九二）年三月に停年退官したが、平成七年にこのプラズマ科学センターも改組された。こうしてみると随分慌ただしかったというべきであろう。

他の部局と比較すれは二十八年の歴史は必ずしも長いとは云えないであろう。しかし、上のような事情で研究所が落ち着いた雰囲気にないときは、その歴史を短期日にまとめるのは容易ではない。幸いにも改組三年前の昭和六十一年十二月に「プラズマ研究所２５年史」を発行したばかりであった。この助けを借りることにした。二十五年史の執筆者は多いが、まとめは委員長の私と水野幸雄教授、佐藤照幸教授の三名からなる編集委員会が行った。所

内で相談した結果、このメンバーがそのまま部局史執筆を担当するのが適当ということになった。それで、大部分は既にある資料を基に書き進めることができて仕事が大幅に軽減できた。新たに追加すべき事項、特に移転と改組の話は事態の推移を追って内田所長（当時）始め多くの人の助けを借りながら記述した。三名の編集委員会は身軽で随時相談できた。

他方移転問題であるが、次期装置建設用地のための準備委員会が正式にできた昭和五十五（一九八〇）年から数えても既に十数年になる。しかし、土地購入予算が認められたのは平成元年からであるから、核融合科学研究所はなお移転の最中である。現在の土岐市にある新サイトは、とくに故石塚元学長、飯島元学長、故早川前学長と三代に渡るご尽力に負うところ大である。昭和六十三（一九八八）年四月に名古屋大学が核融合研究所（仮称）の準備機関となり、学内にその創設準備室が設けられるまで、私はプラズマ研究所側の責任者として地元交渉に当たっていた。当時、故早川前学長は文部省学術審議会委員で核融合部会長も務めて居られた。それで、地元交渉のための助言を直接いろいろと頂くことができた。地元交渉は一方で大変であったが、他方では研究情報に通ずることになるので部局史執筆の助けになった。

今図らずも、日本における核融合研究の発展に関する資料収集および調査という仕事に協力することになり、この部局史を読み返し利用しているが、出来映えがまずまずでほっとしている。なお、執筆中にしばしば「核融合はどうなったのか」の質問を受けた。異論があるかも知れないが、科学としての制御核融合の実証に入りつつある段階というのが現時点での私見である。

（名古屋大学名誉教授）